

テーマ 「隣接する高校との相互理解を目指した交流及び共同学習」

～交流及び共同学習を通して見えた成果と課題について～

所属 鹿児島高等特別支援学校 教諭 小野 琢磨

Keyword: 隣接する高校、相互理解

I 目的

1. はじめに（問題の所在）

本校は、鹿児島県立東高等学校（以下A校）と同じ敷地内に開校した12年目の特別支援学校である。本校では、知的障害のある生徒に対して可能な限り社会自立（就職）をめざすため、特に職業教育（働くために必要な力を身に付けるための教育）を中心とした教育を行う高等部（普通科）のみを置く、本県で初めての特別支援学校である。A校とは互いの物理的距離は近いが、互いに近くにいながら関わりをもとうとする様子が少なく、心の距離には開きがあると感じる。同じ敷地内で学習しており、登下校時や学習の様子を互いに見聞きする機会も多いにもかかわらず、コミュニケーションが不足しており、互いが真の意味で理解できていないのではと感じる。

将来、生徒一人一人が社会で自立し、地域社会において、触れ合う活動を通して互いを正しく理解し、助け合い、支え合って生きていくことが求められる。そのような力を育むためにも、A校との交流及び共同学習を積極的に行っていく必要があると考える。

2. 研究の目的

- ・ A校との交流及び共同学習の機会を設けることで互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合う姿勢の育成につなげたい。
- ・ A校との交流及び共同学習のメリットや課題を検証し、今後の様々な学習へつなげたい。
- ・ 交流及び共同学習の効果的な推進方法の考察につなげたい。



交流及び共同学習に向けた打合せの様子

II 方法

1. 本校生徒について

本校生徒全般にいえることだが、素直で真面目な生徒が多い反面、他者とコミュニケーションを取ることに苦手意識をもつ生徒が多い。普段、自校のみの小集団で活動することが多いため、異集団や大集団での交流を苦手としている生徒も多い。また、教師等の大人との関わりはできるが、同年齢の他者との関わりを苦手としている生徒も多々見られる。

2. 研究の計画

A校との交流及び共同学習の内容は、主なものとして、合同体育祭、合同文化祭、1年時の交流学習が挙げられる。今回はその中で昨年実施した1年時の実践を取り上げる。この交流及び共同学習は総合的な探究の時間を活用し、5月と12月の2回実施した。実施に当たっては、まず、各学校の担当職員同士で事前に打合せを綿密に行い、日程、内容、場所等について共通理解し、その後も定期的に話し合いをもちながら実施に向けて準備を行った。5月には、互いに学校紹介VTRを制作し、それぞれの学校で視聴を行った後、各学校に関する三択クイズを実施した。なお、新型コロナウイルス感染症の拡大を考慮し、リモートでの実施となった。12月には、5月の交流終了後に実施したい内容について生徒に事前アンケートをとり、その結果スポーツ交流を実施することとなった。準備の段階から互いの生徒が主体的に活動できるよう意識し、教師同士でも理解を図った。

A校との交流計画

前期（リモートによる交流）	後期（スポーツ交流）
・ 教師同士による打合せ ・ 代表生徒同士による打合せ ・ 事前学習（準備） ・ 交流及び共同学習 ・ 事後学習（感想、アンケート等） ・ 検証	・ 教師同士による打合せ ・ 代表生徒同士による打合せ ・ 事前学習（準備） ・ 交流及び共同学習 ・ 事後学習（感想、アンケート等） ・ 検証

III 結果

5月の交流及び共同学習（リモートでの交流）では、互いの学校の紹介を通して、A校と自校の良さや特色について知る良い機会となった。また、直接ではないが、互いに話をしたり、コミュニケーションを取ったりす

ることで、ようやく心の距離感を縮めることができたように感じた。これまで、近くにいながらなかなかできていなかった触れ合い活動が行え、これをきっかけとして互いに挨拶を活発に交わしたり、会話できる関係性を築けたりした。敷地内にありながら、顔は合わすが言葉を交わす関係にまではなかった生徒同士が、この機会を通して互いを知り、交友関係を築くきっかけになったのは大きな成果と感じた。12月には対面での活動ということで、生徒が主体的に行動するために教師がどのようなアプローチをしていけば良いのかを事前に考えた。当日は、生徒が多くのかしと支援を必要とするだろうと想定していたのだが、実際は、私達の予想に反して生徒達自身が積極的に生き生きと活動する姿がみられ、教師側のかしや支援は最小限に留まった。普段見ることができない生徒の一面に触れることができ、こういった機会の大切さを痛感した。ほとんどの生徒から「とても楽しかった。また交流したい。」「お互いのことが理解できてよかった。」等の前向きな感想が聞かれた。

なお、交流及び共同学習についての実施に当たっては、A校と同じ出身中学校の生徒がいたため、心理面での配慮等を行う必要があった。



リモートによる交流の様子



スポーツによる交流

別支援学校ということで、実施に当たっては互いの学校の教育課程や年間計画も勘案しながら、計画しなければならなかった。そのような中で、お互いの担当職員間で趣旨を共有し合い、できる方法を模索しながら実施した。実施後は、生徒、職員共にお互いの距離感を大きく縮めるきっかけとなり、それが学校生活全般に良い影響をもたらしたと感じる。また、生徒達は私達教員の想像以上にそのような機会を求めていることに気付かされた。特にここ数年、新型コロナウイルス感染症により人との交流が大きく制限されてきたことも、一因としてあったと思われる。本校の立地的優位性を存分に生かしながら交流及び共同学習を推進していく必要があると感じた。交流及び共同学習を単なる形式的な学習に留めることなく、将来の生活に生かしていくことも目的にしつつ、実施していかなければならなかったと感じた。なお、特に最近では、高等学校においても指導の支援を必要とする生徒が、多々在籍している状況が見られる。そのような状況を鑑みると、これからは高等学校と特別支援学校との連携の重要性が、ますます高まると思われる。まずは互いをよく知ることが大切で、このような機会をとらえて生徒同士の交流のみならず、教師間の交流も深めていくことで、お互いの学校の良さを生かした教育活動に繋がるのではと感じる。そして、インクルーシブ教育システムの推進の観点からも交流及び共同学習の在り方については、A校との連携を深めながら今後も試行錯誤していく必要があると感じた。

《引用・参考文献》

- ・『学習指導要領』
- ・「特別支援学校における交流及び共同学習の現状と課題」
創大教育研究 第23号：杉本 P39～51

Ⅳ 考察

今回の交流及び共同学習に関しては、高等学校と特

共に学び、豊かに育ち合う交流及び共同学習の在り方

～交流を学校生活の中に日常化する取組の実際～

熊本市立出水南小学校 教諭 宮部 恵理子

Keyword：交流及び共同学習，支援学級，支援学校

Ⅰ はじめに

本校は、全校児童数770人の学校である。特別支援学級5学級（知的障害2学級，自閉症・情緒障害3学級）には、27人の児童が在籍している。開校以来、隣接している熊本支援学校との交流を続けており、日々の学校生活の基盤となっている。

交流及び共同学習は、児童の実態に応じて教育課程を編成し行っている。交流学級との関係は、担任児童ともに良好であり、特別支援学級児童も交流学級での授業に意欲的に参加している。ここでは、知的障害学級6年生の取組を紹介する。

Ⅱ 対象児の実態

知的障害学級6年生3人は、特別支援学校小学部の教育課程に沿って編成している。交流学級の授業に参加したいという意欲は高いが、実態等を加味して教科学習を一部とし、行事や朝の会等へ参加を多く設定している。大人や子供に関係なく、他者との関わりを好み、学校生活を落ち着いて過ごすことができている。その反面、自分の気持ちを相手に伝わるように話したり場の状況を把握したりなど、集団の場や相手に応じた関わりについては支援が必要である。

Ⅲ 取組の実際

1. 1年生との交流

(1) ねらい

○紙花を再利用した「汚れ拭き」の制作を通して、就労や社会参加に対する意欲を高める。

(2) 対象

知的障害学級6年児童と本校1年生

(3) 事前打ち合わせ

1年部と、次のことについて確認した。①支援学級の理解を深めるための関わりの手段であること②誰かの役に立つことで感謝される喜びを知り、就労へつながりたいこと③年間を通して活動すること



写真1 1年担任に渡し

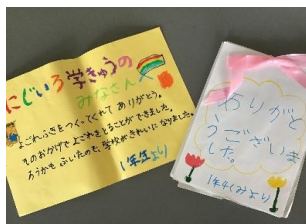


写真2 お礼の手紙

(4) 活動の様子

表1 1年生との交流活動計画

次	活 動 内 容
1	事前学習 ①1年生のためにできることはないか考える。 ②汚れ拭きの制作を、1年間を通して行うことを決定する。
2	交流活動 ①行事後の紙花を分解する。 ②入れ物に1年生が好む絵を描く。 ③入れ物に紙を入れる。 ④1年生に渡す。(渡すときの台詞の練習) ⑤定期的に紙の補充をする。
3	事後指導 ①写真や動画で活動を振り返り、感想を書く。 ②活動の様子を教室に掲示する。

対象児は、6年生に進級した喜びとやる気にあふれていた。また、6年生として、1年生との関わりも求めていたことからこのような取組を設定した。

汚れ拭きの制作を通して、紙の補充や使用状況の把握のため、定期的に1年教室に行くなど積極的に関わる様子が見られた。また、1年生が知的障害学級の教室に直接紙の補充に来ることもあり、触れ合う姿を見かけた。1年担任からの肯定的な声掛けや感謝状をもたらったことで自信にもつながった。

2. 6年生との交流

(1) ねらい

○交流を通して、友達との関わり方を知りコミュニケーション能力を高める。

○周囲との関わりの中で自分のできることを知り、自尊感情を高める。

○共同学習を通して、相互理解を促す。

(2) 対象

知的障害学級6年児童と本校6年交流学級

(3) 事前打ち合わせ

6年交流学級担任と、次のことについて確認した。

①友達との関わりを求めているが、コミュニケーションを取るときに支援が必要なこと②学習や活動を通して相互理解を深めたいこと③共に成長を感じ、卒業する日を迎えたいこと。この他にも、交流学級担任と日頃から両方の学級の児童についての情報交換をこまめに行うなど、子供の見立てが一致するように努め思い

の共有を図った。また、交流学級懇談会での支援学級担任が話をすることで、保護者啓発の場も設定した。

(4) 活動の様子

表2 6年生交流学級との交流活動計画

次	活 動 内 容
1	事前学習 ①どのような6年生になりたいか具体的に言語化する。(卒業した6年生の写真や活動から) ②交流学級で、どのように友達と関わりたいか考える。
2	交流活動 ①運動会での表現の参加の仕方 ②夏の交流集会でのめあて決め ③秋の交流集会での参加の仕方 ④修学旅行での活動の仕方 ⑤交流学級児童の支援学級行事への参加 ⑥卒業式
3	事後指導 ①写真や動画で各行事や活動ごとに振り返り、感想を書く。 ②活動の様子を教室に掲示する。

それぞれの交流活動を行うとき、①対象児の実態や思い②交流学級担任との打ち合わせ③対象児や交流学級児童との話し合い、という手順で活動への参加の仕方を検討するようにした。教師で決めるのではなく対象児の思いを受け、子供達が話し合う中で、参加の仕方を決定していく意図があったからである。そうすることで、支援学級児童の活動に対して、支援学級担任からではなく、交流学級児童からの提案も見られるようになった。

交流学級懇談会では、そのような児童の様子を保護者に伝えることで、さらなる相互理解へとつなげた。これらの活動を続けることで、年度当初は交流学习を困難と捉え交流に消極的だった対象児の保護者も、交流学級児童の思いに触れたり、対象児本人の成長を感じたりすることで活動の様子が見え、安心することができた。支援学級児童も様々な活動に積極的に関わろうとする姿が増えた。



写真3 活動②めあて決め



写真4 活動③秋の交流集会



写真5 活動⑤支援学級行事への参加

Ⅳ 考察

年間を通した1年生との交流は、対象児の次のようなうれしい姿となって表れた。①活動以外の時でも1年生のためにできる

ことを考えるようになった。②1年生と話すときは、1年生と同じ目線の高さで話すようになり、相手のことを考えた行動が見られるようになった。本学級に1年生の在籍がなく、あえて通常の学級の1年生との活動内容を設定した。それを続けたことで、対象児の、6年生としての自覚と自信が芽生え、コミュニケーション能力の高まりを感じることができた。前年度までの様子と比較すると、大きな成長であると考えられる。

この自覚と自信は、対象児の「私も6年生としてみんなと一緒に成長したい。」という思いにもつながった。交流学級児童は、対象児の思いを受け止め、関わり方を自ら考えるようになった。まさに、支援学級児童ができることを尊重し、相互理解を深めることにつながった姿であると考えられる。

そのような環境の中で、対象児は、交流学級の中でも自分の思いを出し、自信をもって学校生活を送ることができたと考える。

Ⅴ おわりに

日々の学校生活の様々な場面で、交流及び共同学習の機会はある。担任同士の連携を密にし、どのような場面で学習効果が得られるか、今後も探っていききたい。その際、毎年実態の違う児童に、どのような交流及び共同学習が必要なのか、見極めることが求められると考える。

交流を特別なものとしてとらえるのではなく、日常生活の中で当たり前に行うことは、本校が開校以来続けてきた熊本支援学校との交流につながると考える。これからも、学校の特徴を生かし、児童の実態に応じた交流及び共同学習に取り組んでいきたい。

《引用・参考文献》

- ・徳田克己監修『みんなのバリアフリー①②③』、株式会社あかね書房、2018
- ・文部科学省 HP 交流及び共同学習ガイド（2019年3月改定）
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1413898.htm（最終閲覧日；2023年6月11日）